

中学入試前期日程 訂正

国語

p 15 問九 選択肢ア 2行目

誤 「……傷ついた心を取りつくろって今まで通りふるまおうしている。」



正 「…傷ついた心を取りつくろって今まで通りふるまおうとしている。」

【一】 次の文章は『猫の事務所』（宮沢賢治作）という小説です。よく読んで後の問いに答えなさい。

軽便鉄道（※1）の駐車場の近くに、猫の第六事務所がありました。ここは主に、猫の歴史と地理をしらべる
ところでした。

書記はみな短い黒の縞子（※2）の服を着て、それに大へんみんなに尊敬されましたから、何かの都合で書記
をやめるものがあると、そこらの若い猫は、どれもこれも、みんなそのあとへはいりたがってばたきました。
けれども、この事務所の書記の数はいつもただ四人ときまっていますから、その沢山の中で一番字がうまく
詩の読めるものが、一人やつとえらばれるだけでした。

事務長は大きな黒猫で、①少しもうろくしてはいましたが、眼などは中に銅線が幾重も張つてあるかのように、
じつに立派にできていました。

さて、その部下の

一番書記は白猫でした、

二番書記は虎猫でした、

三番書記は三毛猫でした、

四番書記は竈猫でした。

竈猫というのはこれは生まれ付きではありません。生まれつきは何猫でもいいのですが、夜かまどの中にはい
つてねむる癖があるために、いつでもからだが煤でできたなく、殊に鼻と耳にはまっくろにすみがついて、何だか
狸のような猫のことを云うのです。

ですからかま猫はほかの猫には嫌われます。

けれどもこの事務所では、何せ事務長が黒猫なものですから、このかま猫も、あたり前ならいくら勉強ができ

ても、とても書記なんかになれる筈なのを、四十人の中からえらびだされたのです。

大きな事務所のまん中に、事務長の黒猫がまっ赤な羅紗（※3）をかけた卓を控えてどっかり腰かけ、その
右側に一番の白猫と三番の三毛猫、左側に二番の虎猫と四番のかま猫が、めいめい小さなテーブルを前にしてき
ちんと椅子にかけていました。

ところで、猫に地理だの歴史だの何になるかと云いますと、

まあこんなふうです。

事務室の扉をこつこつたたたくものがあります。

「はいれっ。」事務長の黒猫が、ポケットに手を入れてふんぞりかえってどなりました。

四人の書記は下を向いて、いそがしそうに帳面（※4）をしらべています。

ぜいたく猫がはいって来ました。

「なんの用だ。」事務長が云います。

「わしは氷河ねずみを食いにベーリング地方へ行きたいのだが、どこらがいちばんいいだろう。」

。「うん、一番書記、氷河ねずみの産地を云え。」

一番書記は、青い表紙の大きな帳面をひらいて答えました。

「ウステラゴメナ、ノバスカイヤ、フサ川流域であります。」

事務長はぜいたく猫に云いました。

「ウステラゴメナ、ノバ……なんと云ったかな。」

「ノバスカイヤ。」一番書記とぜいたく猫がいっしょに云いました。

「そう、ノバスカイヤ、それから何！？」

「フサ川。」またぜいたく猫が一番書記といっしょに云ったので、②事務長は少しきまり悪そうでした。

「そうそう、フサ川、まあまあそこらがいいだろうな。」

「で旅行についての注意はどんなものだろう。」

「うん、二番書記、ベーリング地方旅行の注意を述べよ。」

「はっ。」二番書記はじぶんの帳面を繰りました。「夏猫は全然旅行に適せず。」するとどういわけかこの時みんながかま猫のほうをじろつと見ました。

「冬猫もまた細心の注意を要す。函館附近、馬肉にて釣らるる危険あり。特に黒猫は十分に猫なることを表示しつつ旅行するに非れば、往々黒狐と誤認せられ、本氣にて追跡さることあり。」

「よし。いまの通りだ。貴殿は我輩のように黒猫ではないから、まあ大した心配はあるまい。函館で馬肉を警戒するぐらいのところだ。」

「そう、で、向こうの有力者はどんなものだろう。」

「三番書記、ベーリング地方有力者の名称をあげよ。」

「はい、ええと、ベーリング地方と、はい、トバスキー、ゲンゾスキー、二名であります。」

「トバスキーとゲンゾスキーというのは、どういうやつらかな。」

「四番書記、トバスキーとゲンゾスキーについて大略を述べよ。」

「はい。」四番書記のかま猫は、もう大原簿のトバスキーとゲンゾスキーのところに、みじかい手を一本ずつつけて待っていました。③そこで事務長もぜいたく猫もたいへん感服したらしいのでした。

ところがほかの三人の書記は、いかにもばかにしたように横目で見て、へつとわらっていました。かま猫は一生けん命帳面を読みあげました。

「トバスキー酋長、徳望あり。眼光炯々（※5）たるも物を言うこと少しく遅し。ゲンゾスキー財産家、物を言うこと少しく遅けれど眼光炯々たり。」

「いや、それでわかりました。ありがとうございます。」

ぜいたく猫は出て行きました。

こんな正合で、猫にはまあ便利なものでした。ところが今のおはなしからちょうど半年ばかりたったとき、とうとうこの第六事務所が廃止になってしまいました。というわけは、もうみなさんもお気づきでしょうが、四番書記のかま猫は、上のほうの三人の書記からひどく憎まれていましたし、ことに三番書記の三毛猫は、このかま猫の仕事をじぶんがやってみたくてたまらなくなったのです。

かま猫は、なんとかみんなによく思われようという工夫をしましたが、どうもかえっていきませんでした。たとえば、ある日となりの虎猫が、ひるのべんとうを机の上に出して、たべはじめようとしたときに、急にあくびに襲われました。

そこで虎猫は、短い両手をあらんかぎり高く延ばして、ずいぶん大きなあくびをやりました。これは猫仲間では、目上の人にも無礼なことでもなんでもなく、人ならば、まず髭でもひねるぐらいのことですから、それはかまいませんけれども、いけないことは、足をふんばったために、テーブルが少し坂になって、弁当箱がするするうとすべって、とうとうがたと事務長の前の床に落ちてしまったのです。それはでこぼこではありましたが、アルミニウムできていましたから、大丈夫こわれませんでした。そこで虎猫は急いであくびを切り上げて、机の上から手をのばして、それを取ろうとしましたが、やつと手がかかるかからないかのくらいなので、弁当箱は、あっちへ行ったりこっちへ寄ったり、なかなかうまくつかまりませんでした。

「君、だめだよ。とどかないよ。」と事務長の黒猫が、もしやもしやパンを食べながら笑って言いました。その時四番書記のかま猫も、ちょうどべんとうの蓋を開いたところでしたが、それを見てすばやく立って、弁当を拾って虎猫に渡そうとしました。ところが虎猫は急にひどく怒り出して、折角かま猫の出した弁当も受け取らず、手をうしろに廻して、自暴にからだを振りながらどなりました。

「何だい。君は僕にこの弁当を喰べろというのかい。机から床の上に落ちた弁当を、君は僕に喰べろと言うのかい。」

「いいえ、あなたが拾おうとなさるもんですから、拾ってあげただけでございます。」

「いつ僕が拾おうとしたんだ。うん、僕はただそれが事務長さんの前に落ちてあんまり失礼なもんだから、僕の机の上へ押し込もうと思ったんだ。」

「そうですか。私はまた、あんまり弁当があっちこっち動くもんですから……」

「なんだと失敬な。決闘を……」

「ジャラジャラジャララン。」事務長が高くどなりました。これは決闘をしろと云つてしまわせない為に、わざと邪魔をしたのです。

「いや、喧嘩するのはよしたまえ。かま猫君も虎猫君に喰べさせようというんで拾ったんじゃないや。それから今朝云うのを忘れたが虎猫君は月給が十銭あがつたよ。」

虎猫は、はじめはこわい顔をしてそれでも頭を下げて聞いていましたが、とうとう、よろこんで笑い出しました。

「どうもおさわがせしてお申しわけございません。」それからとなりのかま猫をじろつと見て腰掛けました。

④ みなさんぼくはかま猫に同情します。

それから又五六日たつて、ちょうどこれに似たことが起こったのです。こんなことがたびたび起こるわけは、一つは猫どもの無精なたちと、も一つは猫の前あし即ち手があんまり短いためです。今度は向こうの三番書記の三毛猫が朝仕事を始める前に、筆がポロポロころがって、とうとう床に落ちました。三毛猫はすぐに立てばいいのを、骨惜しみて早速前に虎猫のやった通り、両手を机越しに延ばして、それを拾い上げようと思いました。今度もやつぱり届きません。三毛猫は殊にせいが低かったので、だんだん乗り出して、とうとう足が腰掛けから

はなれてしまいました。かま猫は拾ってやろうかやるまいか、この前のこともありますので、しばらくためらつて目をパチパチさせて居ましたが、とうとう見るに見兼ねて、立ちあがりました。

ところが丁度この時に、三毛猫はあんまり乗り出しすぎてガタンとひっくり返つて、ひどく頭をついて机から落ちました。それがだいぶひどい音でしたから、事務長の黒猫もびっくりして立ちあがつて、うしろの棚から気つけのアンモニヤ水の瓶を取りました。ところが三毛猫はすぐ起き上がって、かんしゃくまぎれにいきなり、

「かま猫、きさまはよくも僕を押しめしたな。」とどなりました。

今度はしかし、事務長がすぐ三毛猫をなだめました。

「いや、三毛君。それは君のまちがだよ。かま猫君は好意でちよつと立っただけだ。君にさわりも何もしない。しかしまあ、こんな小さなことは、なんでもありやしないじゃないか。さあ、ええとサントントンの転居届けと。ええ。」事務長はさつさと仕事にかかりました。そこで三毛猫もしかたなく、仕事にかかりはじめましたが、やつぱりたびたびこわい目をしてかま猫を見ていました。

こんな工合ですからかま猫は実につらいのでした。

かま猫はあたりまえの猫になろうと、何べん窓の外にねてみましたが、どうしても夜中に寒くてくしゃみが出たまらないので、やつぱりしかたなく籠のなかに入るのでした。

なぜそんなに寒くなるかというのに、皮がうすいため、なぜ皮がうすいかというのに、それは土用（※6）に生まれたからです。⑤やつぱり僕が悪いんだ、仕方ないなあと、かま猫は考えて、なみだをまん円な目一杯にためました。

けれども事務長さんがあんなに親切にして下さる、それにかま猫の仲間のみんながあんなに僕の事務所に居るのを名譽に思つてよろこぶのだ、どんなにつらくてもぼくはやめないぞ、きつとこらえるぞ、とかま猫は泣きながらにぎりこぶしを握りました。

ところがその事務長も、あてにならなくなりました。それは猫なんていうものは、賢いようではかなものだからです。ある時、かま猫は運悪く風邪を引いて、足のつけねを腕のように腫らし、どうしても歩けませんでしたから、とうとう一日やすんでしまいました。かま猫のものがきょうといったらありません。泣いて泣いて泣きました。納屋の小さな窓から射し込んで来る黄いろな光をながめながら、一日一杯眼をこすって泣いていました。その間に事務所ではこういう風でした。

「はてな、きょうはかま猫君がまだ来んね。遅いね。」と事務長が、仕事のたえ間に言いました。

「なあに、海岸へでも遊びに行つたんでしよう。」白猫が云いました。

「いいやどこかの宴会にでも呼ばれて行つたろう。」虎猫が云いました。

「今日はどこかに宴会があるか。」事務長はびつくりしてたずねました。猫の宴会に自分の呼ばれないものなどある筈はないと思つたのです。

「何でも北のほうで開校式があるとか云いましたよ。」

「そうか。」黒猫はだまつて考え込みました。

「どうしてどうしてかま猫は、」三毛猫が言い出しました。

「この頃はあちこちへ呼ばれているよ。何でもこんどはおれが事務長になるとか云っているそうだ。だから馬鹿なやつらがこわがつて、あらんかぎりご機嫌をとるのだ。」

「本とうかい。それは。」黒猫がどなりました。

「本とうですとも。お調べになつてごらんさい。」三毛猫が口を尖らせて云いました。

「けしからん。あいつにおれはよほど目をかけてやつてあるのだ。よし。おれにも考えがある。」

⑥そして事務所はしばらくしんとしました。さて次の日です。

かま猫は、やつと足のはれが、ひいたので、よろこんで朝早く、ごうごう風の吹くなかを事務所へ来ました。するといつも来るとすぐ表紙を撫でて見るほど大切な自分の原簿が、自分の机の上からなくなって、向こう隣り三つの机に分けてあります。

「ああ、きのうは忙しかつたんだな、」⑦かま猫は、なぜか胸をどきどきさせながら、かすれた声で独りごとしました。

ガタッ。扉があいて三毛猫がはいつて来ました。

「お早うございます。」かま猫は立つて挨拶しましたが、三毛猫はだまつて腰かけて、あとはいかにも忙しそうに帳面を繰っています。ガタン。ピシャン。虎猫がはいつて来ました。

「お早うございます。」かま猫は立つて挨拶しましたが、虎猫は見向きもしません。

「お早うございます。」三毛猫が云いました。

「お早う、どうもひどい風だね。」虎猫もすぐ帳面を繰りはじめました。

ガタッ。ピシャン。白猫がはいつて来ました。

「お早うございます。」虎猫と三毛猫と一緒に挨拶しました。

「いや、お早う、ひどい風だね。」白猫も忙しそうに仕事にかかりました。その時かま猫は力なく立つてだまつておじぎをしましたが、白猫はまるで知らないふりをしています。

ガタン、ピシャリ。

「ふう、ずいぶんひどい風だね。」事務長の黒猫がはいつて来ました。

「お早うございます。」三人はすばやく立つておじぎをしました。⑧かま猫もぼんやり立つて、下を向いたままおじぎをしました。

「まるで暴風だね。ええ。」黒猫は、かま猫を見ないでこう言いながら、もうすぐ仕事をはじめました。

「さあ、きょうはきのうのつづきのアンモニアックの兄弟を調べて回答しなければならん。二番書記、アンモニアック兄弟の中で、南極へ行ったのは誰だ。」仕事のはじまりました。かま猫はだまってうつむいていました。原簿がないのです。それを何とか云いたくても、もう声が出ませんでした。

「パン、ポラリスであります。」虎猫が答えました。

「よろしい、パン、ポラリスを詳述せよ。」黒猫が云います。⑨ああ、これはぼくの仕事だ、原簿、原簿、とかま猫はまるで泣くように思いました。

「パン、ポラリス、南極探検の帰途、ヤップ島沖にて死亡、遺骸は水葬せらる。」一番書記の白猫が、かま猫の原簿を読んでいます。かま猫はもうかなしくてかなしくて、⑩頬のあたりが酸っぱくなり、そこらがきいんと鳴ったりするのを、じっとこらえてうつむいておりました。

事務所の中は、だんだん忙しく湯のようになって、仕事はずんずん進みました。みんな、ほんの時々、ちらつとこつちを見るだけで、ただ一言も云いません。

そしておひるになりました。かま猫は、持ってきた弁当も喰べず、じっと膝に手を置いてうつむいておりました。

とうとうひるすぎの一時から、かま猫はしくしく泣きはじめました。そして晩方まで三時間ほど泣いたりやめたりまた泣きだしたりしたのです。

それでもみんなそんなこと、一向知らないというように面白そうに仕事をしていました。

その時です、猫どもは気が付きませんでした、事務長のうしろの窓の向こうにいかめしい獅子の金いろの頭が見えました。

獅子は不審そうに、しばらく中を見ていましたが、いきなり戸口を叩いてはいって来ました。猫どもの愕きようと言ったらありません。うろろうろそこらをおるきまわるだけです。⑪かま猫だけが泣くのをやめて

まっすぐに立ちました。

獅子が大きなしっかりした声で云いました。

「お前たちは何をしているか。⑫そんなことで地理も歴史も要つたはなしでない。やめてしまえ。ええ。解散を命ずる。」

こうして事務所は廃止になりました。

⑬ぼくは半分獅子に同感です。

(語注)

※1 軽便鉄道……小型の機関車・車両を走らせる鉄道。

※2 縞子……つやがあつてなめらかな感じの織物。

※3 羅紗……生地が厚い毛織物。

※4 帳面……物事を書くために何枚かの紙をとじたもの。

※5 眼光炯々……目つきがするどい様子。

※6 土用……ここでは立秋の前の十八日間を指す。現在の七月下旬。

問一

本文7行目に傍線部①「少しも、うろくしてはいましたが、眼などは中に銅線が幾重も張つてあるかのよう、じつに立派にできていました」とありますが、これは事務長のどのような様子を表したのですか。最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. 年をとってかん違いや物忘れなどの欠点が目立つようになってしまっているが、一方で目だけは何の欠点もない美しい様子。
- イ. 年をとって判断力や記憶力はおとろえはじめているが、それに不釣り合いなぐらい目だけは威厳があつて堂々としている様子。
- ウ. 年をとってしわが多くなり顔も老人のようになってしまっているが、逆に目だけは十分に整っており若々しい様子。
- エ. 年をとって動きがぶくぶくなっているが、それとは反対に若者のように目だけは眼光が鋭く油断のない様子。

問二

本文38行目に傍線部②「事務長は少しまり悪そうでした」とありますが、それはなぜですか。理由を説明しなさい。

問三

本文54行目に傍線部③「そこで事務長もぜいたく猫もたいへん感服したらしいのでした」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. かま猫が無理に出しやばることのない静かな猫だから。
- イ. かま猫がいかげんな態度で仕事をする猫ではないから。
- ウ. かま猫が土地の情勢に詳しい知識の豊富な猫だから。
- エ. かま猫が先に気をまわして行動できる利口な猫だから。

問四

本文86行目～89行目の破線部「ジャラジャラ十銭あがつたよ」までの会話について、ここで事務長はどのような猫であることがうかがえますか。最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

- ア. 年の若い自分の部下に対し、どうすればえらく思われるかということばかり考えている猫。
- イ. 年をとりすぎて周囲の状況がまったく理解できず、自分が目立つことばかり考えている猫。
- ウ. 年をとっている分、経験を多く積み、部下の性格を十分に理解してたしなめることにたけた猫。
- エ. 年をとって部下を思いやる気持ちが一層強く、あらしをこのまな平和を愛する猫。

問五

本文93行目に傍線部④「みなさん、ぼくはかま猫に同情します」とありますが、「ぼく」はなぜ「かま猫」に同情しているのですか。五十字以内で説明しなさい。

問六

本文114行目に傍線部⑤「やっぱ僕が悪いんだ、仕方ないなあと、かま猫は考えて、なみだをまん円な目一杯にためました」とありますが、ここでの「かま猫」はどのような気持ちですか。最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア. 自分が嫌われるのは、寵で寝るかま猫であるからなのだと、外で寝るように努めてみたものの、やはりそれは無理なことだとわかった。寒がりで皮が薄い体質は、土用に生まれたことが原因なのだから、今さらどうしようもないことだとあきらめている。

イ. 自分が嫌われるのは、色が黒くて汚いかま猫だからであって、それは努力してもどうしても改善できないことだとわかった。かま猫はかま猫にしかねないので、もう仲間に期待することはやめて、つらいけれど一人で生きていこうと決心している。

ウ. 自分が嫌われるのは、他の猫と違うかま猫であるからだと思い、普通の猫としてのあり方を探ってみたけれど、変わることはできなかった。悲しいけれど、これ以上どのようにがんばっても自分が悪いことにしてしまう仲間たちを許そうと考えている。

エ. 自分が嫌われるのは、すすで汚れたかま猫だからなのだと、かまどに寝ないよう努めてみたものの、やはりそれは無理なことだとわかった。もうこれ以上どうしたらよいかわからず、いじめられるのは全て自分が悪いせいだと自分を責めている。

問七

本文137行目に傍線部⑥「そして事務所はしばらくしんとしました」とありますが、ここでの事務所の様子はどのようなになっていると考えられますか。最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア. ほかの猫たちがおもしろ半分で言った冗談に、突然本気になって怒り出した事務長のほかさかげんにほかの猫たちがうんざりしている様子。

イ. ほかの猫たちの言葉で、いつもかま猫をかばっている事務長がかま猫を疑うようになったことをほかの猫たちがすまなく感じている様子。

ウ. かま猫を嫌う気持ちを理解してくれた事務長に対してほかの猫たちが感謝するとともに、みんななかま猫をせめ、おとしいれようとしている様子。

エ. いつもかま猫をかばう事務長がほかの猫たちの口車にのせられてかま猫に腹を立て、それを見たほかの猫たちはかたずをのんで見守っている様子。

問八

本文142行目に傍線部⑦「かま猫は、なぜか胸をどきどきさせながら、かすれた声で独りごとしました」とありますが、ここでの「かま猫」はどのような気持ちですか。最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア、いつもと違う仕事場の雰囲気から、昨日重大な仕事が入り今日はとても忙しくなりそうだと気を引きしめている。

イ、原簿が他の猫の机の上にあるのを見て、これから自分によくないことが起こるのではないかと不安になっっている。

ウ、いつもと違う仕事場の様子を見て、昨日休んでいる間に他の猫たちにいたずらをされたのではないかと疑っている。

エ、原簿があちこちに散乱しているのを見て、昨日は手分けをして仕事をしてくれたのだと他の猫たちに感謝している。

問九

本文156行目に傍線部⑧「かま猫もぼんやり立って、下を向いたままおじぎをしました」とありますが、このときの「かま猫」の心の様子はどのようなものですか。最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア、自分が仕事をするための原簿がなくなったうえ、他の猫から無視されてどうすればよいかわからないが、傷ついた心を取りつくろって今まで通りふるまおうしている。

イ、自分にとって他の猫に協力してきた大事な過去は原簿と共に失われてしまっただと返ってこないという、自分という存在が無になってしまったように感じている。

ウ、自分がほかの心のない言葉で傷ついたことを他の猫に見せつけることによって同情を誘い、なんとか自分が命より大切にしてきた原簿を返してもらおうと考えている。

エ、事務長が自分の方をまったく見ないことから、自分の原簿を三つに分けた主犯は事務長だと考えてしまい、これまでのことを忘れて事務長に対して怒り、憎んでいる。

問十

本文163行目に傍線部⑨「ああ、これはぼくの仕事だ、原簿、原簿、とかま猫はまるで泣くように思いました」とありますが、ここでの「かま猫」はどのような気持ちですか。最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア、他の猫と共に仲良く仕事をした過去を持つかま猫にとって、よい思い出の象徴ともいえるべきものが原簿であつた。その原簿を三つに分けられたという事で、自分の大切な思い出に傷がつけられたような気持ち。

イ、自分の原簿には載っていないことはなく、自分は仕事の上で答えられないことはなかった。それなのに原簿を取り上げられ、何も分からないただの無能で不潔な猫だと決めつけられたような気持ち。

ウ、かま猫にとって、仕事をするということやまたその仕事を果たすための原簿は自分の誇りそのものであつた。それが他の猫に取り上げられたことで、自分のよりどころを失ってしまったような気持ち。

エ、自分は原簿によって仕事をし、それによって生活をしてきた。しかし、原簿を取り上げられた今、かま猫の仲間たちから寄せられる大きな期待にどのようにして応えていったらよいだろうという不安な気持ち。

問十一 本文166行目に傍線部⑩「頼のあたりが酸っぱくなり、そこらがきいんと鳴ったりする」とありますが、ここでの「かま猫」はどのような状態になっていると考えられますか。最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア. 仕事を白猫に取り上げられてしまったかま猫は、自分の存在する意味が自分自身で見いだせなくなっている。

イ. 自分が休んでしまったことをどうつぐなえばよいかわからないかま猫は、いたたまれない気持ちになっている。

ウ. 自分の仕事がなくなってしまった原因をつくった白猫に対してかま猫は、もうれつに怒りを感じている。

エ. 自分の休んだことが事務所のみんなに嫌われてしまう原因だったことに気づき、はずかしく感じ始めている。

問十二 本文178行目に傍線部⑪「かま猫だけが泣くのをやめてまっすぐに立ちました」とありますが、それはなぜですか。八十字以内で説明しなさい。

問十三 本文181行目に傍線部⑫「そんなことで地理も歴史も要ったはなしでない」とありますが、なぜ「獅子」はそのように言ったのですか。最も適当なものを次のア～エの中から選んで、記号で答えなさい。

ア. 地理や歴史は生き物の生きた証拠である。猫たちがかま猫を遠ざけるのは生き物がそれぞれな生き自分の生き方を大事にしていけないことによるから。

イ. 地理や歴史を知ることによって生き物は知識を得て過ちを繰り返さなくなる。しかし、この事務所の猫たちは何も学ばずまた同時に過ちを繰り返そうとしているから。

ウ. 地理や歴史は猫の世界や社会のあり方に対する理解を深めるためのものであり、それを扱っている事務所で差別することは本末転倒だから。

エ. 地理や歴史はそれを学ぶことによって他の存在の痛みや気持ちがり優しく接することができる。しかし、ここでの猫たちはかま猫の気持ちを考えていないから。

問十四 本文184行目に傍線部⑬「ぼくは半分獅子に同感です」とありますが、作品中の「ぼく」はここでのどのような考えを持っていると思いますか。あなたの考えを説明しなさい。

【二】

次の傍線部①～⑩のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 国際的な会議の全権を大使にイニンする。
- ② フクギヨウとして始めた仕事かうまくいく。
- ③ 自由研究で徳川家のケツミヤクを調べる。
- ④ 卒業記念で桜の木をシヨクジュする。
- ⑤ 生活に便利な商品をコウアンする。
- ⑥ 五十年後の日本の人口をスイケイする。
- ⑦ あの映画の最後の場面はアツカンだった。
- ⑧ 国宝の仏像をハイカンする。
- ⑨ 小学生の中で彼はキワダって背が高い。
- ⑩ ジュクレンを要する伝統的な仕事につく。

【一】

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

問十一

問十二

問十三

問十四

【二】

①

⑥

②

⑦

③

⑧

④

⑨

つて

⑤

⑩

※ 評 点

受験番号

氏 名